ポスター発表

2025年11月2日(日) 13:00 ~ 13:50 | 会場(金森産業ホール)
[P2] ポスター発表 #2

[P2-33] 海外パーソントリップ調査の社会調査としての活用可能性 －2001年のカイロ大都市圏における市民生活と行動パターンを例に－

*後藤 寛[1] (1. 横浜市立大学)

キーワード：カイロ大都市圏、エジプト、パーソントリップ調査、社会地区分析、デイリーリズム

本報告は統計データの入手が困難で精度に疑問がある場合が多い海外調査を補完する手法として、JICAによって行われたパーソントリップ調査に焦点を当て、東大CSISによる「人の流れデータ」を通してその活用可能性を検証する。パーソントリップ調査で得られた個人属性（職業、年齢、性別など）、トリップ目的、時間情報は、社会地区分析の基礎情報として活用できる。本調査は延べ11万7千人、57万回のトリップを記録し手織り、サンプルバイアスや国民性に起因する回答の不正確さを留意しつつ用いることで、時間地理学の観点をもって解釈することで、都市の時空間構造をさまざな視点から把握し、海外都市の生活実態を解明する上で有用な情報となり得る。とくにデータの性格上交通手段や目的に注目することで都市のデイリーリズムを明らかにすることが可能となる。ただしその具体的な分析においては当該国・時期の事情を理解した活用が必要である。たとえば職業構成や交通機関選択、学校制度など現地事情を踏まえた理解は欠かせない。
本調査は2001年の大カイロ圏、新都心の開発が進み都市が中世以前の境界をはるかに超えて拡大しつつあり、庶民の伝統的な生活様式を色濃く残しつつもホワイトカラーの「近代的」な生活様式が二極化・重層化し、爆発的な経済成長の前夜といえる時期の経済・社会状況を記録する貴重な現代史料である。

©一般社団法人地理情報システム学会